

〔研究ノート〕

北宋・欧陽脩「秋声賦」の絵画化について

楚の宋玉「悲しき哉、秋の気たるや。蕭瑟として、草木は揺落し衰えたり」(『楚辞』九辯第八より)に知られるように、中国では古くから秋を愁いの季節とみなし、その想いを詩賦などに詠ってきました。中でも、北宋の文人・欧陽脩(1007~72)の「秋声賦」(嘉祐4年[1059])は、秋風の到来に万物の衰退と人生の斜陽を重ねて詠み上げた名文として知られます。本稿では、この「秋声賦」の絵画化について探ります。

「秋声賦」がいつから絵画としても表されたかは判然としませんが、12世紀前半には既に北宋の蘇軾「赤壁賦」(元豊5年[1082])が絵画化されており、名賦を絵画と共に鑑賞する趣向のもと、「秋声賦」もこの頃には描かれていた可能性があります。北宋の『宣和画譜』(宣和2年[1120]序)では、馮觀が描いた「金風万籟図」なる作品について「この画を見ると笛の如き風音が樹間から聞こえるようで、思いが深きに致ることは、『秋声賦』を詠むかのようだ」と評しています(卷十二「山水三 宋内臣馮觀」)。11世紀後半には、風という気象を描く画を鑑賞する際には本賦がしばしば想起、引用され、画の妙趣を味わう思いが共有されていたとみられます。他にも文字史料には、元の王惲の七言絶句「題朝元宮劉道人秋声図」(『秋澗集』卷三十三)、明の張寧

の五言絶句「秋声図」(『方洲集』卷十)などがあり、時代を通じて本賦に関する画が描かれていたことを窺わせます。

現存作及び文字史料を確認すると、「秋声賦図」は、明清時代の蘇州で活躍した文人画家たち、すなわち呉派のあいだでしばしばなされたようです。領袖である文徵明を筆頭に、呉派は「赤壁賦」や唐・白居易の「琵琶行」など、名文にまつわる故事を絵画化しており、「秋声賦」もまた、そうした関心のもとに描かれたとみられます。現存作の多くは、概ね「秋声賦」の冒頭の場面をもとに描いています。すなわち、静かな夜、屋内で読書する欧陽脩が、西南の方角から聞こえる音を不思議に思い、童僕に外を見に行かせると「空には星と月が白く輝き、天の川がかかっています。あたりに人の声もなく、あの声は樹間から聞こえてきます」との答えを得て、それを秋風の音と悟り「なんと悲しい、これは秋の声だ」と嘆息する、というものです。唐寅「秋声図巻」(図1。泉屋博古館蔵)は、画中に大きく樹木を表し、雲霞を漂わせることで風の到来を示唆し、屋内で読書する欧陽脩、外を見に行く童僕、空に昇る月などを描きます。更に唐寅には正徳3年(1508)の年記をもつ「秋声賦図巻」(台北國立故宮博物院蔵)も伝わります。文徵明の作と

伝わる「秋声賦図巻」(図2。嘉靖26年[1547]、上海博物館蔵)は、画面右側に、大きめに表された樹木、太湖石の聳える茅屋に欧陽脩が坐し、画面左側には江水の景が広がります。必ずしも賦文で描写されていないモチーフも含まれるこの構成は、同時代の呉派で流行した、文人(しばしば実在する人物)が、自分の書齋や別荘でくつろぐ様を理想化して描く「書齋図」「別号図」などのそれに近似します(図3。参考：文徵明「真賞齋図巻」同28年[1549]、上海博物館蔵)。そして明末清初(17世紀)の蘇州文人・邵彌の「秋声賦図巻」(図4。崇禎15年[1642]、北京故宮博物院蔵)は、唐寅や文徵明による「秋声賦図」の表現を継承し、枝葉をゆらす樹木と漂う雲霞による控えめな風の表現、画面右側に家屋や人物、樹木等のモチーフ、もう片側に江水の景を表す構図をとっています。したがって「秋声賦」は、16世紀呉派文人画壇の好んだ「書齋図」等の定型フォーマットに、故事を象徴するモチーフを描き込むことで絵画化され、それが後の「秋声賦図」制作の資となったのではないかと考えられます。

そして清時代(18世紀)揚州で活躍した華岳の「秋声賦意图」(図5。乾隆20年[1755]、大阪市立美術館蔵)は、樹木等のモチーフの描写や色彩、画面構成など、呉派風の顕著な作品で

す。ただ本図では、木々が乱れて葉がちりちりに吹き飛び、雲霞がぶわりと一気に樹間を渡るさまを表すことで、画中を吹く風をダイナミックに示す点が、これまでの「秋声賦図」と異なります。職業画風との差異化もあつてか、基本的に過剰な気象表現をしない文人画にあって、かなり劇的かつ大胆な表現といえますが、これは「秋声賦」を絵画化するうえで最も肝要といえる風の表現を、文人画らしい雅趣を損なわずにいかに行うかという画家の挑戦、当時の典範であった呉派文人画風のマンネリズムからの脱却を感じさせます。結果として、従来の文人画家達が控えめにしか表さなかった風の存在をより明瞭に表すことで、賦中で欧陽脩が切々と述べた、万物が枯れ落ちる秋の到来がいよいよ切実に感じられ、これまでにない「秋声賦図」となっているのです。

以上、「秋声賦図」は、文学作品の絵画化、また風という気象を画家がいかに表そうとしたかを考察するテーマとしても、重要な画題といえます。

(都甲さやか)

※図1は泉屋博古館、図5は大阪市立美術館より提供。図2・3は『中国古代書画図目』第2巻(文物出版社、1987年)、図4は前掲書第21巻(2000年)より転載しました。



図4



図1



図2



図3

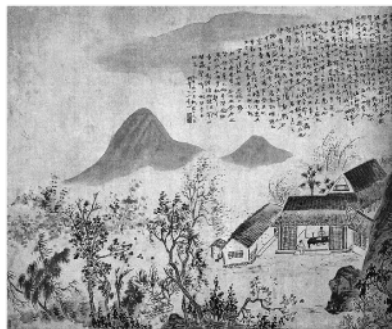


図5

季刊 美のたより No.231

令和7年 7月 11日

発行 大和文華館